



### コレクティブ・アクトとは

コレクティブ・アクトは、私が企画・運営・モデレータを務める、食を社交の手段、食卓を社交の場として利用した集いのシリーズである。元々はスウェーデンとその美術界の凝り固まった閉鎖的な社会の風潮への私なりの反応として始めた活動であり、主にスウェーデンや南米など文化的差異のある地域で開催してきている。

その土地の社会で「他者の視点」を持つ私が疑問に感じたこと、知りたいと思ったことなど、毎回異なる主題を設定し、その主題に基づいて招待客、提供する飲食物、開催場所・日時を決定し、そこでは伝統やしきたりなど私の背景に在る日本の社会・文化を参照に用いることで私なりの見解を表現するとともに、集まりを主催する上でほめてなしの心でホスト役、ディスカッションにおいてはモデレータ役に徹している。

十人程の異なる背景をもつ招待客に、飲食を共にしながら主題について語り合う、議論する場を提供することで、共に社会・文化的状況を省み、社会問題について考えるきっかけを作り、また食を共にすることで参加者間に新たな関係性を生み出していっている。

### 『コレクティブ・アクト 006 いかにスウェーデンを代表するか』

日時 2010年9月25日  
場所 スウェーデン・ストックホルム  
国立民族博物館 茶室 瑞暉亭



(上)国立民族博物館内の茶室、瑞暉亭の縁側にて昼食を楽しむ参加者たち(右上)茶室内の日本の伝統的な部屋で、いかにスウェーデンを代表するかを討論する参加者たち(右下)コレクティブ・アクト006では社交の手段として、秋の味覚を用いた日本の手作りお弁当を用意。

コレクティブ・アクト006においては、海外にいる際、または外国からの来訪者を迎えた際など、自身が母国の「宣伝大使」となるような状況において、スウェーデン人がどのように国、文化、自然や社会を紹介し、またスウェーデンに関するどのようなステレオタイプを刷新したいかを問うた。これはスウェーデンを代表し、現代美術家としてブラジルに4ヶ月間滞在するにあたり、スウェーデンで生まれ育ったわけでもなく、スウェーデン人でもない私が、いったい何を代表するのかという疑問から着想を得た。参加者は、かつて海外のメディアからスウェーデンを代表して取材を受け、それぞれデザインやサウナ文化などについて対外的に語った経験の持ち主たちである。

自分自身の背景を今回の社交の場および手段に反映させるため、国立民族博物館にある日本の伝統的なお茶室で開催、季節の味を生かした日本のお弁当を用意した。

議論では、社会における平等性や開放性、それらの時代による変化、いかに「スウェーデンらしさ」が映画などの文化を通して浸透していったかなど、主として物質的な表象よりも精神性が話題の中心となった。



(上)参加者に送られた招待状。二つの異なるものを結ぶ、というコンセプトを水引で表現したデザイン(右上)地元の伝統的菓子職人とのコラボレーションで制作した抹茶味のアルファホレ。古き時代のものを取り入れた現代陶芸を制作する現地の作家パロマ・ガルシア・オルティスの器にて提供(右下)ブエノスアイレスの日本庭園にて行われたディスカッションの様子

### 『コレクティブ・アクト008 地球の裏側と橋渡し』

日時 2011年5月25日  
場所 アルゼンチン・ブエノスアイレス 日本庭園  
サポート 国際交流基金、日亜文化財団、URRA



私の母国、日本の地球の真裏側にあるブエノスアイレスにおいて開催したコレクティブ・アクト008では、アルゼンチンにおいて、古きと新しき、地元のものと同外来のものがどのように共存しているのかについて語り合った。この主題は、新旧入り交じり、南米でありながら欧州の雰囲気を選び、様々な顔をもつ街の印象、またアルゼンチンと日本の間の物理的・心理的距離への個人的関心から着想を得た。

アルゼンチンの国家休日に日本庭園にて、日本伝統文化の現代的アレンジとしての抹茶ラテとアルゼンチンと日本の融合のジュースチャーとして地元の菓子職人と協働制作した抹茶味のアルファホレ(当地の名菓)を提供する、ハイブリッド版のお茶会となった。お茶請けに使用した陶器も、参加者の陶芸家が祖母の作ったテーブル飾りを元に新たな陶器を制作した点を考慮し採用、主題と呼応させた。

討論は盛況で、周辺諸国や前統治国に関係するアルゼンチンの持つ複雑な過去が重要な背景として浮上し、歴史を考慮すると何を「地元の」と定義するのか、経済及び教育に起因して途切れることもなく流入する新しい移民の波などが中心的話題となった。地元特有の言い回しである *Lo atamos con alambre* がアルゼンチン人の精神性を物語るものであり、討論の中で繰り返し言及された。この言葉は、問題のある状況をうまく切り抜ける方法を見つけることを示すと同時に、その性急さのために取り繕ってもまたすぐに同じ問題が浮上するとわかっているということ、という困難な状況における二つの側面を反映している。